

太王四神記 第6話 陰謀の序曲

2008(平成20)年2月25日 鑑賞<梅田ブルク7>

★★★★



監督=キム・ジョンハク/出演=ペ・ヨンジュン/イ・ジア/ムン・ソリ/ユン・テヨン/
トッコ・ヨンジェ/パク・サンウォン/オ・グァンロク/チェ・ミンス/チャン・ハンソン
/ホン・キョンヨン (2007年韓国ドラマ/57分)

特集

熱狂的ブームの去った今こそ真価を問う！

……第6話はサブタイトルがピッタリの展開に……。そのポイントは、タムドクの出生の秘密が大神官の口から告げられたこと。チュシンの星の下に生まれた真の王はホゲなのか、それともタムドクなのか、俄然政局の焦点に……。他方、キハは3部族長たちの前で朱雀の心臓の力を見せつけたうえ、チュシンの王ホゲにごあいさつを……。これは大長老のなせる技だが、彼の陰謀の牙はすごい。今、その序曲が鳴り渡ったが……。

■ サブタイトルの意味をしっかりと

第5話はキョックの試合をメインとして描いたが、それと同時に「太王四神記」の根本テーマである王位継承をめぐるタムドク（ペ・ヨンジュン）とホゲ（ユン・テヨン）との確執（といっても、この時点ではタムドクは王位に全然執着しておらず、それにこだわるのは一方的にホゲだけ……？）についてもチラチラと。ところが第6話は、『陰謀の序曲』というサブタイトルをみてもわかるとおり、いよいよその本ネタについての論点が整理されていくとともに、ある陰謀が……。

その陰謀とは、火天会大長老（チェ・ミンス）の指示による①クアンノ部族長の息子カムリ、②スンノ部族長の息子ヨンス、③ソノ部族長の息子アラハンの拉致監禁。しかも、その命令がヤン王（トッコ・ヨンジェ）によるものだと仕組んだものだから、タチが悪い（というより大長老の悪知恵がすごい……？）。一方でそんな陰謀が進められる中、遂にヤン王は自ら王位を退き、太子タムドクを新しい王にすると宣言したから大変。だって、新しい王が即位するには、5部族全員の合意が必要なものだから……。

タムドクの出生の秘密と政局の行方は……？

第6話では天地神堂を司る大神官（ホン・キョンヨン）が各部族長の前で17年前の自分の体験を赤裸々に告白する。その内容は、チュシンの星が輝いた日に生まれたのはタムドクだった、というものだったから、聞く者は皆ビックリ！ 当然自分の息子ホゲこそがチュシンの星が輝いた日に生まれたチュシンの王と信じているガリョ（パク・サンウォン）が、これに対して「そんな事実を天地神堂と王だけが知って隠していたのか」と詰め寄ると、ヤン王は「将来のチュシンの王の命を守るため隠すしかなかった」と答弁。この丁々発止のやりとりは、わが国の「ねじれ国会」におけるワケのわからない国会審議よりよほど迫力があるが、ヤン王はここで「王の座をふさわしい者に譲る」という重大発言をしたから大変。以降、新王の即位式が無事実現できるかどうかを最大のテーマとして、高句麗国の政局が展開していくことに。

次第にフッケの存在感の比重が……

第5話から急に存在感を増してくるのが、キョック大会に黒軍の主将として登場したチョルロ部族セドゥルの父親である部族長のフッケ（チャン・ハンソン）。他の3部族の長は、その息子がヤン王によって拉致監禁され人質にされていると誤解している（？）のに対し、フッケはあの決勝戦におけるタムドク太子の助力を深く感謝していた。もっとも、それによって息子を含む黒軍の選手たちがヨン家の牢獄に閉じ込められているのは不安だが、今フッケはヤン王に対して忠誠を誓っていた。そんなフッケに対して第6話では、ヤン王はチョルロ部族の娘をタムドクの妃に迎えたいとまで言及したから、フッケがこれに感激したのは当然。

このように、3部族の息子の拉致監禁一人質を軸とした新王の即位式実施の可否が大きなテーマとなる第6話以降は、チョルロ部族の動静が大きなカギを握ることになるからそこに注目！

キハのこの行動は自由意思……？ それとも……？

第6話のラストには大きなハイライトシーンが登場する。それは、自分の屋敷にチョルロ部族を除く部族長を集めたガリョが神官キハ（ムン・ソリ）を呼び、「高句麗を守る4つの守護神、朱雀の守り主キハ様」と紹介するシーン。部族長たちが何をバ

かなことを言ってるのだと思ったのは当然だが、そこで朱雀の心臓を持ったキハが示した恐るべき行動に皆ビックリ。すなわち、キハの全身は炎に包まれ、ヨン家の屋敷の上空には高く炎が上がっていったのだ。

これによって腰を抜かした部族長たちは、キハが朱雀の守り主であることを認めたのは当然。そして、そのキハが「チュシンの王にごあいさつを」と述べながらホゲに対してひざまずいたことによって、部族長たちは王位継承者がホゲであると認識することに。ところで、キハはなぜそんな行動を？ それが大問題だが、実はキハは大長老によって右の背中に烙印を押されていたから、ひょっとしてこれはキハのホントの意見ではなく、大長老のコントロールによってなされたもの……？

それはともかく、キハのこの行動が与えたインパクトは大きく、以降、大長老が仕掛けた陰謀の序曲は大きなうねりを見せていくことに……。

2008(平成20)年2月27日記

ミニコラム

表紙撮影の舞台裏（7）

『シネマ19』は韓国映画特集2。さあ表紙をどうしよう？ ベストは2泊3日程度での韓国撮影旅行だが、中国語での映画評論本出版のための中国旅行が迫る私には、そんな余裕はとてなし。そこで思いついたのが済州島^{チェジュ}での写真撮影。といっても本場の済州島ではなく、大阪市西区江戸堀にある高級焼肉店の済州島だ。私がこの店を知ったのは約20年前で、東映のKさんの紹介によるもの。そう、谷山義松・春子夫婦が経営するこの店は、春子ママの幅広い人脈のおかげで映画関係者がよく集まる玄人筋で有名な店なのだ。

梅雨の合間の晴れの日、タクシーで乗り込んだのは、モデルの私とカメラマンの金子友次朗の他、アドバイザー（？）細谷優子と家内の2人。

全体の構図と私のポーズが決定するまで100枚以上の撮影で約1時間かかったが、さてその出来は？ ちなみに私が右手を置いているのは、「石製の爺さん」を意味する済州島方言であるトルハルバン。これは集落の入口を表す位置標識の機能を果たしてきた済州島伝統の石製造形物だが、その微笑みと私の微笑み、どちらが魅力的……？

2008（平成20）年8月5日